

県民会議委員からの提案議題について

第40回水源環境保全・再生かながわ県民会議の議題として、川島委員から4件の議題が提案された。

- 1 今後予定されている無花粉杉新植地のシカ対策、柵の義務化について
- 2 中標高域や低密度下でのシカ捕獲手法の見直しと新たな研究開発推進について
- 3 獣害対策協議会が運営するジビエカーの稼働状況、および市民の利用について
- 4 竹用木質バイオマスの拡充と、地域水源林における拡大竹林整備の位置づけについて

四者協議会において、水源環境保全・再生施策との関連度の高い1、2を議題とすることとした。

1 今後予定されている無花粉杉新植地のシカ対策、柵の義務化について

現在神奈川県下ではどこの地域もシカの影響下となり、箱根山地の新植地では角コスリや剥皮被害が頻発し、柵の設置は不可欠となってきた。今後十年間に多くの林地で無花粉杉への転換が計画されているが、柵の設置は計画されているだろうか？

小田原市の県行造林久野の今年度無花粉杉新植地では、林縁部で約33.4%の頂芽の採食が確認された（山盛の会の調査資料あり*）。新植地は、シカの主要な餌場で周辺に比較して栄養価の高い餌が豊富にある。新植地を行動圏にもつ個体を捕獲しても次々と新しい個体が出現する。シカを取り除くことは難しい事が丹沢の教訓と聞いている。

また、全国でも低密度下での巻き狩りによる管理捕獲は費用対効果の点でも勧められない手法と聞く。捕獲が進まない中、伐採や新植がどんどん進み、激害を引き起こしシカの高密度化にもつながる。1km先の農地でも既に被害が続出している。

また、現在地拵え中で無花粉杉新植が予定されている釜石林道沿い林地では、すぐ近くで苗木食害が発生しているのにシカ柵ではなく野兎柵が巻かれたところである。

箱根山地、丹沢山地、小仏山地の無花粉杉植栽計画でのシカ対策と、柵の設置義務化について検討して頂きたい。

2 中標高域や低密度下でのシカ捕獲手法の見直しと新たな研究開発推進について

被害対策としては、フェンスの設置が必要だが、生物の多様性保全については、広域の個体数コントロールが必要である。生物多様な森林が良好な水源林を形成するのであり、植生劣化を起さない管理を目指さなければならない。

最近の文献を読むと平方kmあたりの生息密度が5頭以下では、費用対効果の点で捕獲効率が落ちると書かれている。箱根山地でも巻き狩りが行われているが、その後の成果はどうか。箱根山地の生息密度は2~3頭/平方kmと聞いているが、稜線や尾根部などで下層植生の劣化や裸地化が起こり、指標となるアオキの後退前線は既に標高500mまで下がってきている。

植生の劣化をもたらさない生息密度は、箱根の経験からは1頭/平方km以下、あるいは限りなく0に近くなければ望めないと感じている。それは丹沢でも同じはずである。銃猟での巻き狩りは低密度では苦戦し、すれジカを増やすと聞く。管理目標を再検討し、誘引捕獲や、シャープシューティング、市民を巻き込んだくくり罠など、新たな捕獲手法の研究開発の検討を行い、植生の回復が見込める管理目標に向かって、官民一丸となって捕獲を行う体制作りをする必要がある。

※ 山盛の会の調査資料「県行造林久野新植地の林業被害調査」は割愛